

カラリストの世界

三岸節子は、初期は室内画や静物画、渡欧後は本格的に風景画に挑戦し、以降日本とヨーロッパを歩き来しながら、豊かな色彩感覚で独自の世界を築き上げました。自ら“色彩画家(カラリスト)”と名乗るほど、色彩にこだわりを持っていた節子が、長い画業のなかで見てきた世界とはいったいどんなものだったのでしょうか？

色彩の移り変わり

1925(大正14)年、春陽会第3回展で初出品した作品が女性として初入選を果たし、20歳で画壇デビューを飾った節子。ここから約70年にわたって画家としての歩を進めていく中で、節子作品の色彩は時代とともに変化していきました。

画業初期

初期の作品は、身近な静物や室内風景を中心に、鮮やかな色づかいと独特のタッチで描かれました(No.2《静物》)。これは、マティスやボナールといったフォービズム(野獣派)の画家たちからの影響が大きいと考えられています。特に“色彩の魔術師”といわれたボナールについて、画集を読み漁っては「いつも色彩の饗宴が渦巻き、思想の火華がたえず奏でられてあるといった感じを受ける」(注1)と絶賛しています。こうした鮮やかな色合いの作品のほか、オーレオリン(黄色)と赤を少し混ぜ暖色系に統一した、落ち着いた色調の静物画(No.3《静物》)も制作しています。

念願の渡欧後

1954(昭和29)年には、憧れ続けたヨーロッパへ初めて渡り、1年半ほど異国の地でスケッチをして過ごしました。この渡欧は、自分が日本人であるという自覚を再認識するきっかけとなり、帰国後は埴輪や素焼きの壺などをテーマに乾いた素朴な色味の作品を描きます(No.6《盾を持った武士》)。全体的に褐色でまとめられた色彩と、モチーフの造形美が融合した作品が多く残されています。

お気に入りの風景

より本格的に風景画に挑戦したいという思いがあふれた節子は、1968(昭和43)年に再び渡仏。南仏カーニユを制作活動の拠点とし、ヨーロッパ各地の風景をキャンバスにおさめました。特に、冬のヴェネチアとアンダルシア地方の街並みは節子のお気に入り、視点や色調などパターンを変えながら描いています。

長い画業の中で、年代によって色調の変化は見られますが、その鋭い色彩感覚は衰えることなく、研ぎ澄まされていることが分かります。

カラリスト 私は色彩画家

色が私の体質の中にあるんです。色は生来のものですから、私の中に生まれつき色が備わっていると思います。ですから、花の絵を描く時も、今度は赤い花を描こうとか……最初にイメージするのは形ではなく黄、青、白といった色なんです。形は色を追求していく間に出てくるんですね。

色だけでは生まれつきのもので、他にどうしようもないようですね。

色彩画家といわれるひとはほとんど南方系で、日本でも関西より南の方ですね。北の地方の方はモノトーンの微妙な色合いは出せても、美しい赤、豪華な赤を出せる人があまりいらっしゃいませんね。これは不思議です。(注2)

色彩には宿命的なつながりがあり、生まれた場所や土地によって表現する色が異なると節子は考えていました。「もしあたくしが中京という土地に生まれなかったら、色彩なども今とは違ったものになった」とも語っています。

ある時は黄色に執着する時期があります。燃えるやうな朱に熱狂する時代がありました。渋い茶や、そして今は緑の系統にひかれてゐるのです。心をゆすぶりとろかすやうな色彩を求めて、色から色への遍歴が、静物といふ実在を通して繰り返されてをります。

色彩の追求、色彩の画面での決定が即ち造型を究める手段でありタブローの骨格をなし、デッサンでありもするのです。色彩が快い詩を唄ひださなくては絵画(タブロー)は軌道に乗らないのです。(中略)美しき色彩は即ちすぐれた造型と最緊密に結びあはされてゐるのだと堅くわたくしは信じてをります。(注3)

カラリストとしてより良い作品を生み出すため、年中色彩に悩まされながらも、節子は常に色彩に対する飽くなき追求心を持って制作に臨み続けました。



神奈川県大磯にて

(注1) 三岸節子「近代の表現」『美神の翼』求龍堂、1991年、38頁

(注2) 三岸節子『華』求龍堂、1998年、74頁

(注3) 三岸節子「静物画家の独白」『花より花らしく』求龍堂、1977年、20頁